

平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

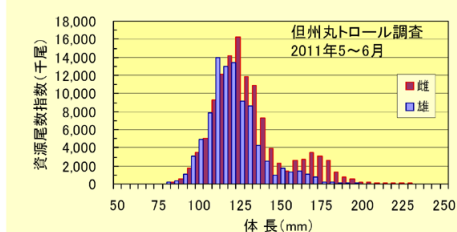
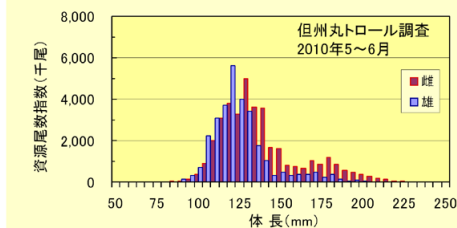
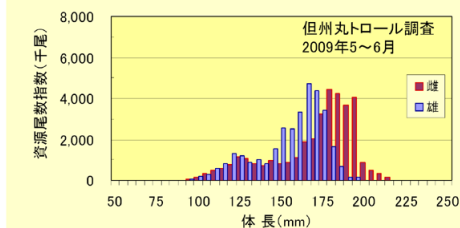
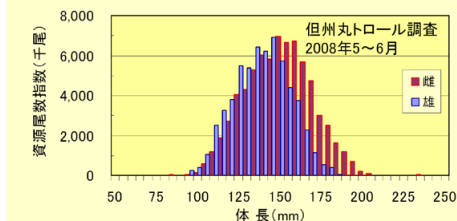
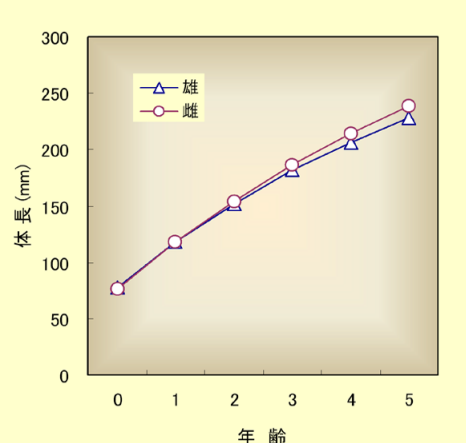
系群名 日本海西部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 5歳(年齢は、ふ化した年を基準に暦年で示す)
成熟開始年齢: 雄:1歳(100%)、雌:2歳(100%)
産卵期・産卵場: 12月の極短い一時期、沿岸の藻場、能登半島以西にはまとまった産卵場がない
索餌期・索餌場: 未成魚期以降の分布と回遊に関する知見は少ない
食性: 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者: 大型魚類によって捕食されるが、詳細は不明

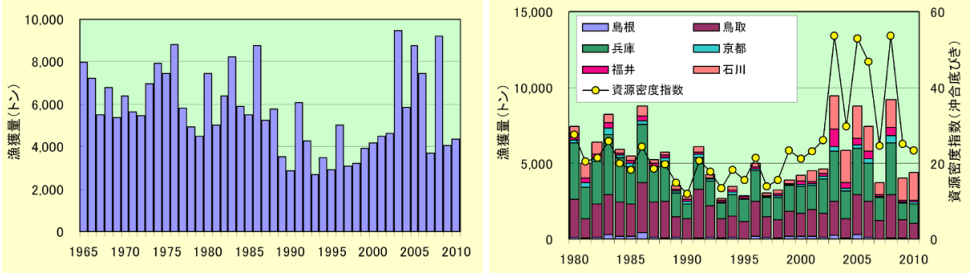


漁業の特徴

兵庫県と鳥取県では沖合底びき網、京都府以北及び島根県では小型底びき網によって主に漁獲され、兵庫県と鳥取県および石川県の水揚げが多い。漁期は休漁期前の3~5月、休漁明けの9月である。11~1月の漁獲量は少ない。

漁獲の動向

日本海西部のハタハタの漁獲は、過去50年間、数年での上下動を伴いつつ長期的には緩やかに変動してきた。過去最高を記録した2003年以降も半減・倍増しながら、平均5,000トン以上を維持している。近年の漁獲量は、2007年が3,706トン、2008年は2006年卓越年級に支えられ9,217トン、2009年は4,046トン、2010年は4,381トンであり、直近4ヶ年の平均は5,338トンであった。

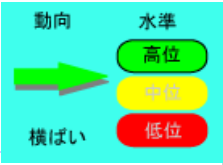


資源評価法

日本海西部における漁獲量および沖合底びき網(1そうびき)の漁獲成績報告書による資源密度指数から資源状態を判断した。さらに、漁獲物の体長組成[生物情報収集調査(鳥取県、兵庫県および石川県、特に鳥取県の漁獲物組成を重視する)およびズワイガニ等底魚類現存量調査(5～6月)]から、近年の年齢構成および今後の加入状況を考察した。

資源状態

2010年の漁獲量は4,381トンとなり、2003年以降で最少の2007年と同等であった。しかし、2008年は過去最多の2003年と同等であり、直近4年の平均値は5,338トンであった。この値は、水準区分の基準とした直近4ヶ年の過去の最高値およそ7,500トンを3等分する各値の5,000トン(高-中)、2,500トン(中-低)のうち、高-中の基準を上回っている。したがって、資源水準は高位と判断した。過去5年における漁獲量の推移は、大きな上下動を伴いながらも、その振れ幅や多い年と少ない年の各値はそれぞれ変わらないことから、動向は横ばいと判断した。



管理方策

本系群の資源は、数年での大きな上下動はあるものの、平均的には2003年以降の高水準を維持しており、現時点では高位水準、横ばい傾向にある。直近2年(2009年、2010年)の漁獲量は、高位水準期の上下動の中での少ない年となったが、2011年のズワイガニ等底魚類現存量調査に基づく結果から、2010年級の豊度は高い可能性がある。現状の漁獲圧のもと、2010年級を有効に利用するべきである。

	2012年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	5,300トン	1.0Cave4-yr	—	—
ABCTarget	4,300トン	0.8・1.0Cave4-yr	—	—

- 100トン未満を四捨五入

資源評価のまとめ

- 2008年は9,000トンを超える豊漁、2009年は半減、2010年は2009年と同等であったが、直近4年間の平均漁獲量は依然として5,000トンを維持している
- 資源は引き続き高い水準にあり、動向は横ばい
- 2010年級の豊度は高く、卓越する可能性がある

管理方策のまとめ

- 現状の漁獲圧のもと、資源を有効に利用するべきである
- 網目拡大等の自主規制等の措置を呼びかけ、1歳魚の保護に努め、2歳魚主体に利用することが肝要

執筆者：藤原邦浩・上田祐司・松倉隆一

資源評価は毎年更新されます。